

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (23)〉

# 多様な機能をもつ幼少年期教育・保育施設

— フランクフルト市における

陶治ネットワークの活用実態 (1) —

大戸美也子

幼稚園と保育所の機能の一体化を目指す施設が動きだす一方で、幼保小の教育の連続性が強調されています。複数の機能をもつ、異年齢の子どもたちの生活と学習をどのような一貫した考えで進めていくかが、今問われているといえます。この新しいタイプの幼少年期の施設と教育を考えると、非常に示唆されたのがちょうど三年前の平成十七(二〇〇五)

年十二月に広島と東京で開催された、「幼児のケアと教育の統合を求めて—フランクフルト市の挑戦」と題する講演会でした。この講演会は、「就学前の教育・保育を一体として捉えた一貫した総合施設モデル事業」(平成十七年四月開始)が着手され、翌年十月から認定子ども園に引き継がれる時期に、海外での幼保一体化の取り組みについて学ぶために日本保

育学会の課題研究委員会と国際交流委員会とが共同企画して開催され、講師にフランクフルト市学務局就学前教育担当官のシュポーケツト女史が招かれました。

彼女の講演は、大きく二つの内容からなっていました。一つ目は、ドイツでは幼稚園と保育所に学童保育をも加えた幼少年期の教育・保育施設 *Kindertagesstätte* (以下 *KITA*) という総合施設が立ち上げられ、この新施設は「子どもの保護 (*Betreuung*) と 陶冶 (*Bildung*) と 教育 (*Erziehung*)」の三つの機能をもって展開していること。二つ目には、フランクフルト市学務局が音頭を取って進めている「陶冶ネットワーク」というユニークなプログラムの具体的な紹介でした。

あまり耳慣れない *Bildung* という言葉に戸惑いつつも、この言葉が「子どもが外界のさまざまなものと取り組み、内的な世界をつくり上げる、そのため

の主要な活動」を表していることを知り、目の覚める思いがしました。子どもの自己形成のプロセスをとらえる視点は、わが国の幼保一体化論にも、幼保小の接続論にも必ずしも明確にされなかった概念だったからです。

シュポーケツト女史の話は、「子どもの自己形成のプロセスを誘発し、援助する刺激的な環境、教育的で文化的な教材を提供する」ための「陶冶ネットワーク」や「陶冶工房」など、これまでに見たことも聞いたこともないような取り組みに及び、私は、ビックリしながらも一度現場を訪れ具体的な展開をつぶさに見学して理解を深めたいとの願いを強めました。

そして、本年三月、ようやく念願かなってフランクフルト市の六つの代表的な「陶冶ネットワーク」と「陶冶工房」を訪れ、その実態を知ることができたのです。見学先はすべて、シュポーケツト女史が

選び、自らその案内を務めてくださいました。また、この旅行に、お茶の水女子大学の浜口順子先生と尚綱女学院大学の佐藤陽子先生が同行し、浜口先生の姉上である濱口・クレナー牧子教授（ボフム大学）が通訳に当たってくださいました。ことば、Bildung という言葉の理解を深める上で、また現場での子どもたちのつばやきを知る上で、大いに助けられありがとうございました。

見学先の紹介の前に、フランクフルト市の「陶冶ネットワーク」誕生の背景について簡単にふれておきましょう。

### 陶冶ネットワークの概要

フランクフルト市は、人口六十五万人のドイツ第五位の、また外国人市民の割合の高い都市です。市内には、百三十一の公立保育施設と三百の民間保育施設があり、KITAタイプの施設では、七十〜八十

%をいわゆる移民の子どもたちが占めており、しかも出身国は、一施設で十五〜三十か国にも及んでいます。従って、現代ドイツの保育者は実に多様な価値観や伝統、生活習慣の異なる子どもたちを相手に、彼らの好奇心や探究の意欲を育むという大仕事に取り組んでいるといえます。

フランクフルト市では、一九九九年以来、学務局が仲立ちとなつて市の各種博物館、メディア、音楽芸術関連の施設、スポーツや運動関連の施設などの協力を得て、各施設の文化財を活用して、子どもたちがさまざまな感覚を使って彼らの好奇心や知的欲求を満足させる教材開発を進めてきました。現在、九つの領域にわたる三十五もの施設とネットワークをつくり、保育者は各施設の専門家や学芸員の助けを借りて三〜六歳までの子どもにもふさわしい学びの方法を身に付けるよう、言い換えれば、専門的知識と子どもとの「つなぎ役」の育成も行なわれてい

ます。

研修期間は四日間と短いです。研修後には専門保育者の資格が与えられます。専門保育者の育成で強調されていることは、情報や知識の伝達だけではなく、「空間的、身体的・運動感覚的知性や人間関係の知性の促進と援助」(シユポークェット、百九十二頁、二〇〇七年)です。専門保育者の資格をもつ保育者は、市のいろいろな保育施設の子どもたちのために年間五〜六回は現場指導に当たるほかに、他の保育者のために手引書を作る義務をもっているということです。

また、「陶冶ネットワーク」にかかわる多くの施設に陶冶工房Ⅱワークショップの部屋が設けられていて、子どもたちが体験したことを自ら確かめたり、アイデアを新たに加えたりする自己活動の機会も用意されています。単なる体験学習に留めずに、子どもたちの興味や好奇心が心に刻まれ長く持続

するような配慮があるところに、フランクフルト市の「陶冶ネットワーク」の特色が見られます。このような研修の試みは、ドイツ最大の恐竜の化石をもつ自然史博物館、ゼッケンベルク博物館で始まったということですが、私たちの「陶冶ネットワーク」と「陶冶工房」の訪問の旅もこの博物館からスタートしました。

## 陶冶ネットワークの実際(その一)

1. ゼッケンベルク自然史博物館での  
恐竜の化石をめぐる  
五歳児のフィールドワークと  
陶冶工房の活動

ゼッケンベルク自然史博物館は、一八八三年フランクフルト市の三十二名の市民によって結成された自然研究協会を母体に、市民の自然への関心を高め



▲写真1：展示室での活動

る社会教育の場として開設されました。開設にあたり植物や医学などの自然科学に関する知識を市民に広めるために、一七六〇年代から私財を投じ募金

活動を進めてきた医師であり自然科学者のヨハン・ゼッケンベルク博士の名前が付けられ、百年にわたる市民の科学教育の啓蒙のために諸活動を展開してきました。しかし、幼児向けのプログラムが開発されたのは一九九九年のことで、同博物館学芸部長のヴァインター博士の協力のもと、三〜六歳までの子どもたちの小グループを対象に保育者が博物館案内をする最初の試みが行われました。最初は、資格をもつ保育者が、自分のクラスの子どもたちを対象に学芸員に付き添われて行われたということです。

ワールドワークの当日、子どもたちはまず裏口からワークショップの部屋に直行して、その日の簡単な活動予定を聞いてから、展示室へ移動します。展示室の中央に展示してあるひととき大きな恐竜の化石の足元に車座に座り、その日の活動が始まります（写真1）。

この日は、五歳児が七名と若い専門保育者と担任の保育者、それに将来この領域の専門保育者を目指す保育者も参加していました。一般の入場者は、子どもたちの横で化石を見上げています。

専門保育者「みんな、化石を見てどんなこと感じますか？」

子どもたち「大きい」「骨ばっかり」「尻尾が長い」  
専門保育者「生きていたときには、肉も皮膚も付いていたの。ほらー」

と言って、ミニチュアの化石の原型を示す。  
専門保育者「ほかに、気づいたことなーい？」  
子どもたち「歯が大きい」「とがっている」

専門保育者は、三十センチメートル大の黒い鋸やじりのようなものを取り出して見せます。「これ、何だと思う？ これは恐竜の歯なの……」「歯は白いの

に、どうして黒いの？」「長〜いこと、土の中に入っていたから、土の色が付いてしまったの」という会話をひとしきり済ませると、歯の大きさを知るために



▲写真2：ワークショップでの活動

歯を子ども一人ひとりのひじにあてながら大きさを確かめていきます。展示室で恐竜の化石の現物を見ながら、子どもは自分の気づいたことを自由に語り、専門保育者は子どもにも応えつつ、新たな教材を提示して気づきの世界を広げていきます。展示室の活動を終わると、再びワークショップの部屋に戻り、子どもたちは今見てきた恐竜の化石について本で確かめたり、鋭い歯の絵を描くなど、体験を心に刻む活動に入るのでした（写真2）。

## 二 K I T A 9 におけるメディア活動

フランクフルト市の中心から西へ車で三十分ほどのところにあるK I T A 9は、外国人市民の多い地域にあり、二十六か国の出身国をもつ百四十一人の三十二歳までの子どもたちが生活しています。

フランクフルト市の場合、K I T A を利用する子どもたちの保護者の八十％が移民で、その多くは低



▲写真3：施設長のベッカー先生と副施設長のカイザー先生

所得階層にあるということです。保護者の出身国が二十六か国ということは、二十六の言語と価値観と生活習慣に対峙することであって、その運営は並大

抵ではありません。しかし、多文化教育の専門教育を受け教育歴も豊かな施設長のベッカー先生と最近までシュポークェット女史のもとで市の学務を担当してきた副施設長のカイザー先生（写真3）とは、

「ドイツ語が共通文化を生みだす言語の役割をもつ」という信念をもって学務課の支援と「陶冶ネットワーク」をフルに活用して多様な学習の機会を用意しています。また、コンピュータを多様な言語コミュニケーションのツールとして活用していく方針で、将来的には市監修の教育ソフトの開発も進めていくそうです。

証券会社を改造して作られた施設には、各種の機能をもつ多数の部屋が用意されていました。学童保育向けの歌とダンスを楽しむ「ディスコ・ルーム」や子どもたちが私物を持ち込んで一週間ほど「マイルーム」として使ってよい部屋など、複雑な運営の中で生活学習の場も用意されていて、先生方の

努力には頭の下がる思いでした。

（お茶の水女子大学 チャイルド・ケア・

アンド・エデュケーション講座）

註

1. シュポークェット女史の講演内容は、日本保育学会編「保育学研究」第四十四巻第二号、二〇〇六年、鳥光美緒子訳で収録されている。

2. *Bildung* は、鳥光訳に準じて「陶冶」という訳語を使った。*Erziehung*（教育）という言葉と使い分けて使用しているので、わが国の幼児教育・保育界では全くなじまない言葉であるが、あえて使用した。ドイツにおいても、さまざまの意味でこの言葉が使われているとのことである。陶冶は、子どもが五感を通してつかんだものを主体的に確認することで持続的に記憶に留め「自分をプログラムする」作用のことであり、いわゆる教師の一方的介入による知的教育とは次元が異なるものとして理解している。